
魔法少女の就活

蚊取り線香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女の就活

【Nコード】

N9510W

【作者名】

蚊取り線香

【あらすじ】

魔法少女、その存在が実在したのなら。

職業として魔女が成立し、見習いとして魔法少女というインターンシップのような制度がある世界。

彼女たちは超常の存在であり、アイドルであり、爆弾だった。

超常が日常に身を落とした時、どのように社会構造の基盤が崩れ再構築されるのか、そのゴールは未だ誰も知らない。

ただ彼は、少なくとも自分を慕ってくれる少女くらいは、力及ぶ限りで守らなければと思った。

男としての矜持、異性としての見栄、あるいは兄貴分として。

プロローグ（前書き）

タイトルの通り魔法少女モノ（というジャンルでいいのだろうか）です。幾つかのアニメの影響を色濃く受けています。

ライトノベルらしくカッコつけの主人公＋美少女ヒロインの青春物語です。

作者のつたない文章で紡ぐ物語ですが、生暖かく見守ってくださいれば幸いです。

プロローグ

この世というのはかくも面倒なことに満たされている。

例え超常の存在であったとしても、慣れれば日常に組み込まれ、否が応でも個人の力の限界を知る。

そして世間の、人間のままならなさに嘆くのだ。

だが生き続ける限り、行動し続ける限り、立ち向かい、時に妥協し、あるいは諦めて今日を昨日に、明日を今日にと塗り替えていく。

歳を食い、就職してから思うのだ。はるか昔、スーパーマンのように憧れていた大人とはなんだっただろうか。

「ワカンネ。もうだめだこれ。帰る」

素子のデータシートを見比べ、特性値の重ね合わせを延々と繰り返す作業を私はついに諦めた。

『本日の残業：2時間』と記帳し早々に帰り支度を整える。

「ヤル、無理そうなら早めに打ち上げてくれよ？ まあお前は初めてその壁に当たったみたいだし、悩むのは大いに結構だが……」

と、声をかけてきたのは斜向かいに座る上司だ。よれた作業着は確かに年季が入っているが、童顔なため実年齢50代と言う事実を告げては初対面に驚かれる人物である。

高卒でこの道に入り、黎明期の頃よりひたすらに走り続けてきた我社の顔でもある。社員数38人の零細企業においては、欠くことのできない大人物で、誰一人として頭があがらない。が、別段厳しい人間でもなく柔よく剛を制し、懐の広い様を存分に発揮するので皆から尊敬を込めておやつさん、親父さんと呼ばれている。

「早めにソフィア呼んで現物合わせと微調整します。それで何とかしたいですが、ダメなときはおやつさん、アドバイスお願いします」

「うい、了解。お前はユーザーと親しいっつー何よりも貴重な財産持ってるからな。ああ、そうだ。多少なら接待費として事務の中村

さんに上げとけば出してくれるらしいぞ」

それは魅力的な提案ではあった。が、なんとなく男の見栄として引つかかるものがあり、私はその提案を苦笑しつつ辞退した。

「大した金額じゃないですし、いいですよ別に。ソフィーとは友達として、事務的なことは抜きに付き合いたいんで」

そんな私の心情を汲んでくれたのだろう。おやつさんも苦笑いを返してくる。

「……なあ、来年でソフィアちゃん高3だっけ？」

ふとカレンダーを見たおやつさんが問いかけてきた。

「そつすね。この前夏休み入ったところに、楽しめる最後の夏休みかもって言っていました」

確か私も高校2年の夏休みには同じような感想を抱いた覚えがある。

「始まるな。争奪戦。大人共のきたねえ思慮の中に押し込んでホント申し訳ねえけどよ。お前は自分の立ち位置、そろそろ明確にしとけよ」

後悔しないようにな。とおやつさんは締めた。何をという部分はボカしているが、私だっけわかってる。今まで子供だからで済ませてきていたことを、いつまでもそのままではいられないのだと。

けれど曖昧なまどろみというのは、とても魅力的で、未だその解を出せずにいる。

私は誤魔化しを含めておやつさんと、他に残っていた数人に「お疲れ様です」と告げて早々に会社を出た。

アルコールとつまみ、晩飯材料の補充のためにスーパーを経由して小さな我が家へと辿り着く。徒歩で仕事場に行ける距離というのは、きつと贅沢なのだろう。あるいは人によっては遠ざかりたいかもしれないが。

「ただいまー」

一応声にしてみるが、答えるはずの人はすでに他界済みであった。

父親は高校2年の時に勤め先の事故で、母親は心労がたたったかその後すぐ病に臥せり、私の就職先が決まるのを見届けてから眠るように生を手放した。多額の労災が降りたので金銭的にはそこまで切羽詰っていなかったが、進学をやめ高卒と同時に就職し早5年経つだというのに未だに無言で帰宅するのははばかられ、結局虚空に消える挨拶を今も続けている。

だから、声が帰ってくることは完全に予想外だった。

「やるちゃん、おかえりなさい」

若い女の子の声。どこかゆったりとした、聞きなれた声が出迎えた。

古びた日本家屋の床を軽快に走り玄関に出迎えに来たのは、先の話で出たソフィア、こと高橋ソフィアである。名前のごとく日本人とロシア人のハーフで、日本人に比してメリハリの効いた顔の金髪少女が日本語を流暢に話し、日本家屋に立つ様は凄まじい違和感と非日常な魅力がある。まだ夏休みのはずだが制服姿でのお出迎えに正直怪しいサービスかと思った。これでエプロンなぞつけていようものなら男心を存分にくすぐっただろうが、あいにく彼女には料理を禁じている。私に自殺願望はないのだ。

「あ、ん…？　なんで？」

それは制服姿に対する質問でもあったし、我が家にいることに対する質問でもあった。ソフィアが家に来ることは今までも度々あったが、少なくとも連絡もなく来ることは一度もなかった。

最初は男の一人暮らしだぞ、と暗にほめかしつつ残業で遅くなるからだとか色々理由をつけて帰らせようとした。しかしどうしても相談したいことがある、と言って強情にも私が帰宅する9時過ぎまで玄関の前に立っていたので、私が折れて合鍵を渡したのが始まりである。故に大体我が家に来るときは大小多様な相談事を抱えてくるのだが、なぜ私に振るのか今を持って理解しがたい…と言うことになっている。

「やるちゃん連絡つかないんだもん。ほら、携帯。忘れてっただし

よ
」

彼女のほっそりとした手に支えられ、ボロくなったマイ電話が私の眼前につきつけられた。着信アリということでインジケータが点滅している。

「ああ、今日忘れてたのか。忘れてたことすら忘れてたわ……」

仕事柄個人携帯が必要になる場面が減多になく、別段気にしていなかった。どうしても必要なら即時取りに行けるというのもあり、忘れ物に関しては割と無頓着に過ごすことが多い。

悪い悪い、と携帯を受け取り、玄関を上がる。まず食材を入れるため冷蔵庫に向かって歩き出す私のすぐ後を、律儀にソフィアが付いて歩いてくる。

「まだ夏休みじゃなかったか？　なんで制服だよ」

冷蔵庫を開けながら後ろをちらりと見て私は尋ねた。

「今日ね、進路相談があつたんだよ」

つまるにそれが今日の相談内容ということか。先ほど職場を出る時に言われた内容が頭をよぎる。なんともタイムリーな話だ。

争奪戦が始まる。生まれ持った才が故に、彼女は世界の歪みに巻き込まれていく。

私の立ち位置は未だに定まらない。しかし、彼女を守らなければならぬという気持ちは揺るがずに存在する。その気持ちの着地点は年長ゆえのサガか、あるいは。

私は冷蔵庫に食材を袋のママ放り込んで戸を締める。

体を向け直し不安げなまなざしを送る少女の頭を軽くなでると、私はとりあえずの行動方針を口にした。

「まずは、もっかいスーパー行くか。なんも準備してねえし」

そうして私は『魔法少女』ソフィアを連れ立ち、帰ってきたばかりの家をまた出ることとなった。

プロローグ（後書き）

作者はグラスハートの持ち主なので、もしこんな小説でも感想がありましたら何卒ソフトにお願いいたします。

第1話 名は体を表すか？

私がつまらばら利用しているスーパーは、家から徒歩5分という目と鼻の先ともいえる距離にある。

私の家がある住宅街は国道より南に集合し、国道を挟んだ北側にはスーパーや本屋、服屋に靴屋といった大抵の生活雑貨が揃う店が軒を連ねている。この国道を渡るのに、信号に捕まれば6分、捕まらなければ5分弱程度で各店共用の駐車場に踏み入れることができるのだ。

今回は残念ながらタイミングを逃しソフィアと二人で仲良く歩行者信号の移り変わりを待つこととなった。もうそろそろ8時を回る頃だが、国道の車の流量は依然として多い。折り悪く黒煙を撒き散らすトラックが通り過ぎ、私は顔をしかめた。

「昔はもつとこの道も細くて車の量も少なかったんだがなあ。ソフィアは覚えてるか？」

同じく黒煙に顔をしかめていたソフィアだが、私が話を振ると急に笑みを浮かべた。にやにやと言う表現がぴったり来る笑い方を見て、私は失策を知った。

「そうだねー。やるちゃんが魔法少女だった頃はまだ細かったよね」「若かったんだ。忘れてくれ……」

私は魔法少女に、正確には魔女になりたかった。事実、少女や女とは言うものの魔法を使えるのは女性に限ったことではない。極少数ながら男でも魔法を使うものはいる。が、依然として比率は低く旧来魔法少女や魔女といった呼称は使われて馴染んでしまっていたため、未だに男であっても職業としては『魔女』と呼ばれることになる。

このあたりは近年名称が差別的であるとして、『魔法使い』あるいは英語を直接使用した『ウィザード』といった名称にしようと推進する団体もあるが、現状法の下では『魔女』は公的な職業名とし

て成立したままである。

話がそれた。ともかく私は魔法を使うという行為にひどく憧れていた。この憧れ自体は別段珍しい話でもなく、子供にとって憧れの職業はと聞けば、3割ほどは『魔女』と答えるだろう。低い数値かと思うかもしれないが、これは『消防士』や『警察官』といった『ヒーロー職』への憧れと同列なのである。つまり3割という数値は3割もあるという事を意味する。

だがそれは小学校低学年以下のような小さな子供が見る夢だ。

私は何というかその低学年気分を抜け切ることが出来ず、中学校に入っても魔法使いになりたいのだとたまっていた。今思い返すと恥ずかしさのあまり奇声を上げたくなる。

そんなこんなで、魔法少女にとってのパワースポットと言われる近所の神社を日がな徘徊し、痛々しい魔法を唱える振りをしていた、痛い中学生が過去の私である。

「おかげで今こうしてやるちゃんと並んで立っていられるんだけどね。今思えばよくアレに近づいたなあとは思っけど」

相変わらずニヤついているソフィアにアレ呼びわりすらされるようなシロモノだ。まあ私も同感である。

ソフィアの言う通り、わざわざ彼女はその危険人物に近づいてきたのだ。最初しばらくは先輩の魔法少女だと思っていたらしく、熱心に私の偉業（妄想）を聞いていた。そしてノリ気になって魔法の使えない私に本当の魔法を披露してくれたのだ。その瞬間、私は冷水を浴びたような気分になったのは未だに覚えている。それ以来、私は彼女に自分が本当は魔法が使えないことを打ち明け、罪滅ぼしに彼女の相談には真摯に答えることとした。

「ファーストコンタクトの時俺が中学2年で、ソフィーが小学…2年？ 今時なら下手すりゃ捕まってるな」

「今も大して変わってないと思う……」

昔が寛容であったと取るべきか、今が窮屈であると取るべきかは悩ましい問題である。

こんな時間帯に制服姿の女子高生を連れ歩いて咎められない点だけを見れば、十分寛容なのかもしれない。単に見つかっていないだけで、おそらく見つかった瞬間に速攻で職質を受けるだろうことは確実なのだ。

その程度にはこの二人並んで立っている絵面は豚と真珠という程の差があった。悔しいので自分自身がそこまで醜い人間とは思いたくないが、一方の少女は緩やかなウェーブの金髪を腰まで伸ばした美少女なのだ。そう、恥ずかしいので面と向かつては言えないが、ソフィアは美少女なのである。

これは誇張でもなんでもなく、ある種魔法少女の性だ。研究が進み、魔法には意識的に発動するものと無意識に発動してしまうものがあると判明している。その無意識下の魔法で最たるものが物理的な容姿の向上と、他者に与える感覚的魅了なのだ。これらは総じて『チャーム』一般に呼称されている魔法少女の能力の一つである。

故に、魔法少女は一般に美少女であるし、魔女は美女である。簡単にチャームと呼ぶが、実際は感覚にも作用するため、この容姿端麗に対する嫉妬感情すら抑制する恐ろしい魔法なのだ。魔法少女の付近には基本イエスマンしかない、と言えばその危うさが伝わるだろうか。

私がソフィアのような美少女を隣にはべらせながら平常心でいられるのはこのチャームのおかげである。色恋からは超越し、手を出して傷つける事自体禁忌と心から感じてしまうような存在だからだ。このような無意識魔法が判明した時、誰だったか政治家だか学者だかが述べた言葉がある。「彼女たちは甘美なる毒だ。気づくべき頃には気づくことすら叶わなくなるだろう」と。

そして今、日本を代表する総理大臣は魔女であるし、各国の代表の大半は魔女となっている。

事実だけを述べれば、きつと普通の人間なら漠然とした不安を抱くだろう。が、それに魔法少女と魔女という歯車が加わった瞬間、不安はまどろみの中に消えていってしまう。とはいえ継続する問題

に対してはその効果は薄いらしく、結果として魔法少女達が魔女へと就職する頃になると世間共通認識の『とある問題』が台頭する。

これがおやつさんが言い、私が危惧し、ソフィアが相談してきた『争奪戦』へとつながる。

ここで私はソフィアにどういう態度を取るべきか、立ち位置をどうすべきかが私個人の問題となるが

「やるちゃん、信号青だよ」

「あ、ああ、そうだな」

面倒事に思考を割いている間に信号は変わっていた。今ひとつ思考がまとまらない。仕事中であればトイレに籠ったり、紙に事柄を書きなぐってまずは具現化するなどしたのだが、この場ではそれらの手は今のところ使えない。まあトイレに籠るくらい彼女相手に気兼ねはないが、私自身がどうすべきかを彼女の手前で具現化するわけにはいかない。

不完全に思考から抜け出せないまま、気づけばソフィアに手を引かれての入店となった。

それを見たまばらな客がソフィアを見てギョツとし、手を引く私を見て怪訝な顔をするのを逆に私は見てしまった。この地区では知らない人間の方が数えやすいアイドルが、冴えない男を引っ張って歩いているのだ。私だって他人の立場なら驚いたし、何かを勘ぐっただらう。

ソフィアはそれに慣れているのか気にした様子もなく、私を先導するのをやめて振り返った。

「で、来たはいいけど予定は？」

道すがら何をかう予定かというのは何も話していなかったもので、ソフィアの疑問は当然なのだが、よくもまあその状態で堂々と入店出来るものである。普通は入る前に確認するものではないのだろうか。

「時間が遅いから惣菜適当に繕って、まず飯だな。米は冷凍の予備

があるからいい。ちなみにソフィー、どうせ家には食って帰るって連絡してるんだろ？」

「やるちゃんが遅いせいだかね」

「いや社会人にそんな融通聞くと思うなよ」

ちなみに彼女の親に対し私はすでに認知されている。兄貴分こそ気取っているが、元は親戚でもない他人であり、彼女が私に親しくしてくる以上は挨拶が必要と思つて以前挨拶に伺ったことがある。予想通り彼氏かどうかと勘ぐられたわけだが、私はソフィアが魔法少女であることを理由にそれはないと突っぱねた。その辺り、父親の側は思う所があるらしくあっさり引き下がった。が、母親の側は現役魔女で、夫を自ら攻め落とした経緯からもソフィアをしきりに激励していた。あの時のソフィア父の目は多分被害者を憐れむ目だったと思う。

その時の満更でもないソフィアは見ているし、私に対して好意を向けているのは分かつてはいるのだが、チャームの影響と言うより妹的に接してきたためどうやって異性として見ればいいのか困っている。これが立ち位置として困っている部分だ。

私がおか考えこんでいることを察してか口数の少ないソフィアに感謝しつつ、白身魚のフライとサラダを手に取りカゴへと入れていく。その過程で明らかに怪訝に観察されているのが目端に映る。想像こそしていたが、ソフィアを連れて外を歩くのは実のところ初めてで、非常に居心地が悪い。

レジにつく頃には多少諦めも出てきたため、多少の開き直りではできるようになった。恋人は無いだろうが、父親とか怪しい男とかに見られなければもうどうでもいい。

レジのバイト君にもやはり妙な顔をされたが素知らぬフリを通し、会計に進んだところで私はしばらくぶりの失態に気づいた。財布の中に現金の手持ちがなかったからだ。

もちろん社会人なのでクレジットカードは持っているが、たしかこのスーパでクレジットカードを使うと……

「お手数ですけどサインお願いしやす」

そう、サインを書かねばならないのだ。私はコレが嫌でいつも現金を持ち歩いているが、今日の買い物は追加の予定がなかったのでギリギリ足りる見積もりでいたのだ。それがソフィアが来たことで崩れてしまった。

そもそも何故私がこんなにサインを嫌がっているのかなのだが、この件に関しては両親に恨み言をいくら言っても足りない理由がある。私がサインをすると、事務的にそれを受け取ろうとしたバイト君が私を二度見した。ああ、だから嫌なのだ。隣でソフィアが思い切り吹き出している。

サインの蘭には私によって署名された私の実名が書かれているだけだ。別に特別なことはない。

ただ、書かれた内容が「田中やる気」という、ふざけた名前なだけである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9510w/>

魔法少女の就活

2011年9月25日03時11分発行